

未来を拓く子どもたちの豊かな学びの実現

亀山市教育関係職員 研修基本方針

「一人ひとりの児童・生徒が個性を生かしながら

なかまとともに主体的に学ぶために」

- (1) すべての子どもの学ぶ意欲を高め、社会で生きてはたらく「確かな学力」を育てる教育活動をすすめる。
- (2) 教師の授業力向上を追求するとともに、系統的な指導をすすめる。
- (3) 人権を尊重し、なかまとともに、豊かな心と身体をはぐくみ、自己肯定感・自己有用感を高める教育活動をすすめる。
- (4) 地域の人材や活動を活用し、地域とともに特色ある教育活動をすすめる。

1. 学校教育目標

「豊かな心を持ち、進んで行動する生徒の育成」

2. 研究主題

「かけがえのない自分に自信をもち、

互いの良さを認めあい、つながり高まりあえる生徒の育成」

～ 一人ひとりが生き生きと学ぶ授業づくり ～

3. 研究主題設定の理由

①生徒の実態

関中学校は各学年2学級と小規模の学校であり、生徒たちは豊かな自然とふれあう経験や、昔の「まちなみ」を中心とする文化に触れる経験を経て入学している。素直で、「学校へ行くのが楽しい」という生徒が多く、その割合は全国的にみても高い。行事に対する取り組み姿勢も、たいへん積極的である。

反面、「TVの視聴時間・ゲームやスマートフォンにかける時間」の長さは課題であり、生活リズムの維持や健康への影響とともに、家庭学習習慣の定着にとっても大きな妨げとなっている。また、小学校までに一度構築された人間関係から脱却しにくいという傾向もみられる。個々の生徒が「自分らしさ」を発揮して自己肯定感を高め、思いを出しあって学習に臨むためには、相応の支援が必要である。

学習に関しては、授業に前向きに取り組める生徒は多いが、学習内容の定着に関しては個人差が大きい。

このような実態をふまえ、生徒一人ひとりの学びを保障するために、仲間とのつながりや学習規律、学習環境等を学習のベースとして整えること、補充学習で基礎的あるいは発展的な学びを支えること、授業づくりにおいて毎時の授業の質的向上を図ることを目指した。

②これまでの取り組み、これまでの成果・課題

・学級目標の設定方法を工夫し、学期末や行事後に達成率を確認し、ふりかえり活動をおこなうことができた。

- ・「ふりかえり」については、ほとんどの生徒にふりかえりを書く習慣が付き、量的にも向上しているが、単に書かせるのではなく、指導者側が何を書かせたいかをしっかり考えられていたかが課題となった。教科によっては、「5行以上」という形ではなく、学習した内容を元に作文をさせるなどの工夫をした。
- ・一人一回の授業研究（全体研3回とミニ授業研）を重ねてきたことで、学ぶべきところを自分の授業にとり入れ、実践に繋ぐことができた。
- ・家庭学習に関しては、家庭で学習に取り組める環境が整っている生徒ばかりではないということも考えて、放課後学習を含めて対策を試行したが、部活動への参加をはじめ、諸活動との兼ね合いがあって難しい現状がある。
- ・試験前の質問タイムや長期休業中の基礎学力講座においては、初歩の躓きにより学習しようにも手をつけることができない生徒が一定数いる実態が明らかになった。
- ・生徒の仲間づくりは成果を見せ、つながりあえる関係は様々な場面でみられるが、こと授業に関してはまだまだ生徒と教師とのやりとりや指導者を介してのやりとりが多く、生徒どうしが「つながり高まりあえる」段階には至っていないと判断される。

4. 研究主題について

「一人ひとり」が「生き生きと」学ぶためには、講義形式の（生徒にとって受け身の）授業では達成しにくいことは必然である。だからこそ、受け身ではなく「主体的」な学びを生徒一人ひとりに保障することをいっそう推進する必要がある。

そこで、「生徒が受ける授業」「生徒が参加する授業」ではなく、「生徒がつくりあげる授業」を目指し、生徒が主体となってつくりあげる授業の実践を主眼におき、今年度も引き続き、研究主題「かけがえのない自分に自信をもち、互いの良さを認めあい、つながり高まりあえる生徒の育成」を継続することとした。また、副主題に「一人ひとりが生き生きと学ぶ授業づくり」と設定し、これまでの取り組みをさらに深めている。

授業規律が保たれ、落ち着いた環境のなかで生徒はまじめに座って学習に取り組んでいる。だからこそ、生徒と生徒とが活発に意見交換し、その結果、授業の「めあて」に迫れるような姿を望ましい姿と捉え、「つながり高まりあえる」生徒を育成したい。

《主題》

◇かけがえのない自分に自信をもち

⇒自己肯定感が高まった状態。失敗をおそれず授業中に自信をもって意見を言える。

◇互いの良さを認めあい

⇒自分の意見をもちながらも、他人の意見にしっかり耳を傾け、その考えを謙虚に採り入れることができる。

◇つながり高まりあえる

⇒指導者を介さない状態でも活発に意見を交換でき、「わからない」生徒を支援したり、自分の考えを深化させたりできる。

《副主題》

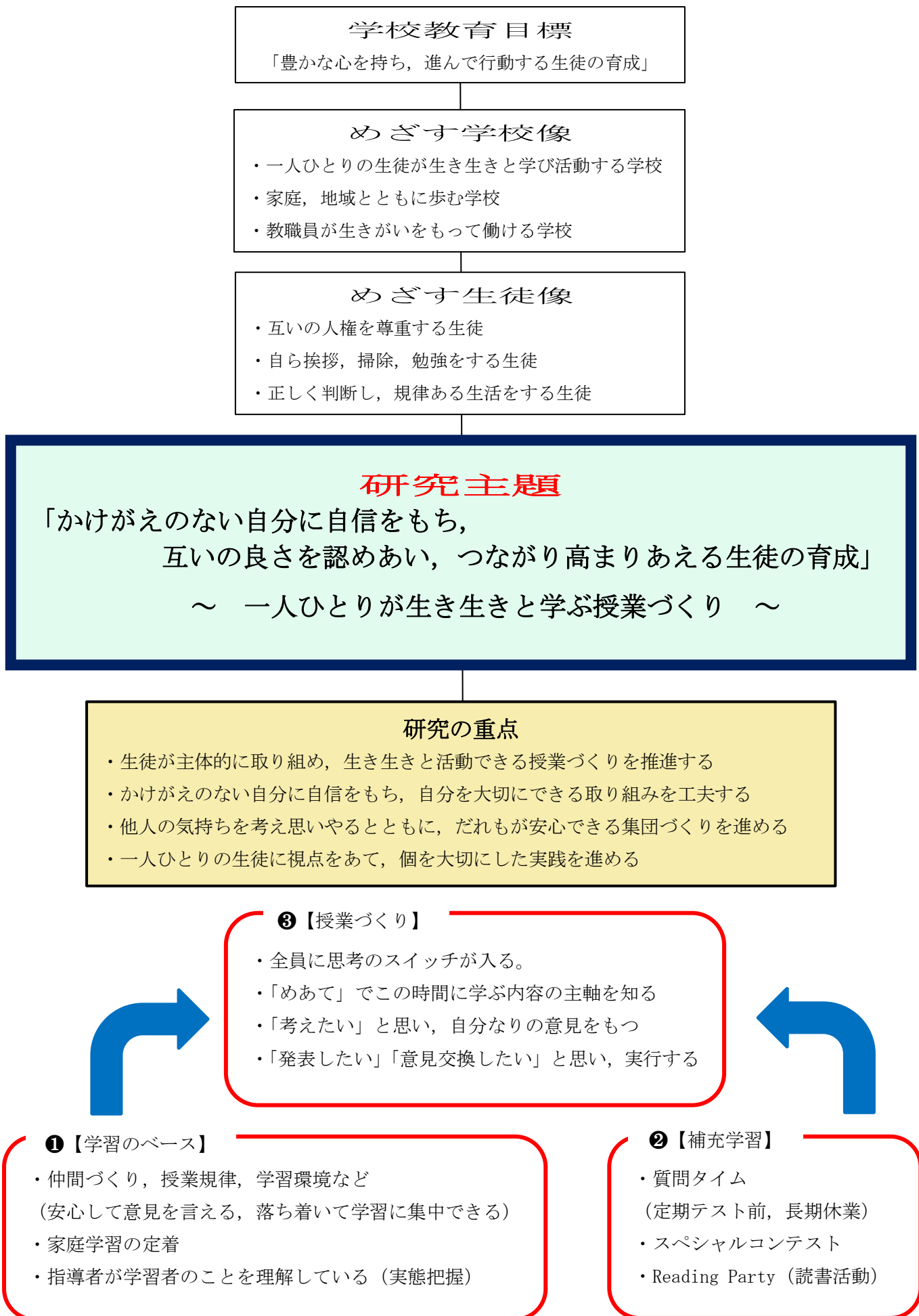
◇一人ひとりが生き生きと学ぶ

⇒全員が参加できる。全員が意見をもてる。全員が「めあて」をもとに、「考えたい」「意見交換したい」という意欲をもって、「めあて」に対する答に迫るべく考えを深められる。

5. 研究領域

道徳を主とする全教科・全領域

6. 研究構想図



7. 具体的な取り組み

【①学習のベース】

- ・仲間づくり，授業規律，学習環境など
（「居心地のよいクラス」という視点での学級目標設定の取り組みを含む）
- ・家庭学習を定着させること ※適切な家庭学習内容やチェックのしかたの検討を含む
- ・各種調査（学力・学習状況調査，みえスタディチェック，Q-U，生活アンケート，人権アンケート，学校評価アンケート等）を分析し，生徒の実態を把握するとともに指導につなげること
- ・SKRA運動（掃除，聞く，ルール，あいさつをしっかりとる生徒会の取り組み），JWK活動（ネットモラルに関する生徒会の取り組み），学びのルールに関する指導の継続

【②補充学習】

- ・定期テスト前の質問タイム，長期休業中の基礎学力講座，スペシャルコンテスト（漢字相撲，Seki English Spelling Contest，計算コンテスト等）
- ・朝の読書，Reading Party（全校読書活動）等の読書活動
- ・家庭学習に取り組めていない生徒や質問のある生徒に対しての，放課後の学習サポートなどの日常的な学習支援（多目的ホール活用）

【③授業づくり】

○生徒に「思考のスイッチ」が入るような導入のくふう

- ・生徒をひきつけ，全員参加させる。
- ・ICT機器を活用するなど，視聴覚に訴える方法を含む。

○「めあて」と「ふりかえり」

- ・「めあて」は授業に入ってからすぐ提示しなければならないわけではないが，生徒にとって心から「考えたい」と思える内容を示す。「～しよう」という行動の指示にせず，「～だろうか」と問う形をとる。
- ・「まとめ」は，教師がまとめるのではなく，生徒の言葉でおこなう。生徒の意見を板書したワードを活用してまとめる方法もある。
- ・「ふりかえり」は，量的に「5行以上書けばよい」というだけでなく，めあてと正対する形で生徒の気づきが見える形で書かせる。
- ・授業の終わりに板書を見れば，その時間の授業の流れが見えることを目指す。

○発問のくふう（魅力的な“謎”の提示）

- ・発問によって，生徒に葛藤が起こる。
「今まではこう考えていたけれど……」「知っている方法では通用しない」
「Aとも考えられるし，Bとも考えられる」など
- ・生徒が「考えたい」と思い，「他の人の考えを知りたい」と思う。
ペア学習，グループ学習によって考えを磨き合う。
- ・生徒が受け身ではない。主体者となる。
「授業を受ける」→「授業に参加」→「授業をつくる」

○授業中の支援

- ・生徒個々の差を埋めるくふう。
- ・机間指導による適切な声かけ。
- ・視点生徒を中心とした支援。また必要に応じて視覚支援。